

日本のネイチャーポジティブを夢洲から 大阪湾岸「いのち輝く」を未来へ

文・写真

加賀まゆみ(夢洲生きもの調査グループ)



写真-1 後半のディスカッション風景(司会は佐久間大輔氏)

9.15国際シンポジウムプログラム

*敬称略

- 開会挨拶 夏原 由博(大阪自然環境保全協会会長)
- 来賓挨拶 マイケル・ブライス(在大阪英国総領事)
西村 学(環境省自然環境局 自然環境計画課課長)
- 基調講演 「沿岸域のネイチャーポジティブとは」
道家 哲平(国際自然保護連合日本委員会会長)
- 特別講演 「渡り性水鳥の危機的状況と大阪湾岸の重要性」
ニコラ・クロックフォード
(英国王立鳥類保護協会 主任役員・シギチドリ研究員)
「沿岸生息地再生に関する国際的な事例研究から大阪湾を考える」
ジェフ・キュー(英国王立鳥類保護協会 湿地再興アドバイザー)
- 休憩——
- 記録映像「ジェフさんの大阪湾岸視察」上映
- ディスカッション「大阪湾岸の生物多様性を高めるために～」
ファシリテーター:佐久間 大輔(大阪市立自然史博物館学芸課長)
- 話題提供 納家 仁(日本野鳥の会大阪支部長)
織田 智也(大阪府環境農林水産部みどり企画課副主査)
三浦 仁美(積水化学工業(株)ESG経営推進部環境経営グループ長)
- 閉会挨拶 葉山 政治(日本野鳥の会理事・国際自然保護連合日本委員会副会長)

私たち夢洲生きもの調査グループが、生物多様性ホットスポットである夢洲に万博・IRが計画されていることを知り、生きもの調査を始めて7年目になります。万博も終了し、跡地に万博施設の一部をレガシーとして残す声も出ています。しかし、私たちは以前から、環境5団体※と共に、夢洲の湿地復元を中心として、大阪湾岸に生物多様性豊かな干潟や湿地を残すよう、関係各所に働きかけています。(※日本自然保護協会、日本野鳥の会、

WWFジャパン、日本野鳥の会大阪支部、当協会)

昨年より英国王立鳥類保護協会(RSPB)との関係もでき、大阪湾岸の自然復元可能地にRSPBの専門家の視察を招聘したり、英国総領事を通してRSPB発の共同書簡を大阪府および大阪市に提出するなど、少しずつ活動の質も高まってきました。

2025年9月15日、ついに念願の国際シンポジウムを開催しました。これまでの環境5団体の活動は国



写真-2 国際シンポジウム会場、大阪市立自然史博物館講堂前の準備風景



写真-3 登壇者とスタッフの集合写真（来賓退場後）

際自然保護連合 (IUCN) 日本委員会の支援と大阪市立自然史博物館の協力を得て、7団体の共催、10の学会の後援で「大阪湾岸『いのち輝く』を未来へ～はじめよう！連携が生み出す豊かな生物多様性～」を実施することができました。

企画スタートから3か月後の実施に向け、行政や企業が同じテーブルで語り合うための交渉、2か国語での討論における相互理解と時短の工夫など、準備はこれまでに体験したことのない複雑さがありました。大阪自然環境保全協会だけでは決して得られない最高の条件で無事開催できたこと、共催団体および関係者の皆さまの多大なご尽力に心から感謝を申し上げます。

当日の会場参加者は132名。ライブ同時配信視聴は105名。3月末までYouTube「大阪市立自然史博物館チャンネル」でアーカイブを見ることができます。（右下のQRコード参照）また、シンポジウム内容は別にまとめて発行する予定ですので、ここでは中心となった議論の要点をご紹介しますにとどめたいと思います。今回のシンポジウムは3時間半でしたが、そこに3つの講演、3つの話題提供、2名の来賓挨拶などが詰め込まれ、登場するキャストは10名を超えます。テーマが拡散しても

おかしくなかったところでしたが、どなたも「連携」がキーワードの開催趣旨を深く理解してくださり、2か国語ということで、登壇の皆さんには、プロの通訳者およびボランティア通訳のエミリーさん（大阪自然環境保全協会）と山岡さん（日本野鳥の会大阪支部）も含め、事前にプレゼン内容の情報共有を行ったこともあり、佐久間さん（大阪市立自然史博物館）の素晴らしい進行で、今後の方向性が明確に見えてきました。

まさに前段の挨拶で言われたように「失われた自然を回復して、次世代に引き継ぐのが私たちの使命」（夏原会長）だから、「大阪湾の未来が真のネイチャーポジティブになることが万博のレガシーになるよう」（マイケル英国総領事）、「関係者が一体となった取り組みが促進される契機となる」（西村環境省自然環境計画課長）ように、私たちはこのシンポジウムをきっかけに新しいフェーズに進まなければならないと思います。



国際シンポジウムのアーカイブ動画
(YouTube@大阪市立自然史博物館チャンネル)

<ディスカッション>

◆ネイチャーポジティブ 具体化のためには

以下は内容要旨（敬称略）。

「自然を回復軌道に乗せるために生物多様性の損失を止め、反転させること」を実現させるためには、多様な立場の関係者に対し、通じる言葉での対話によって合意を作っていくことがスタート。企業なら製品開発者や経営者、株主や顧客など、「経済合理性」という共通言語が不可欠（三浦）。行政は同じ部署内で開発と保全を同時に行う矛盾を抱えている。共通の指針の構築が急がれる（織田）。日本も「自然再生」をビジネスチャンスとしてとらえるべき。国際社会では規制や厳罰の議論も盛ん。それぞれがその場で「共通のビジョン、共通の測り方（成功の物差し）、共通の価値観や危機感を共有できるか」が対話にとって最も重要で、そこからパートナーシップを築けるかがネイチャーポジティブの具体化には必要（道家）。

◆大阪にはポテンシャルがある

「南港野鳥園」が50年前に計画されたのは、東アジア・オーストラリア・フライウェイ (EAAFP) における最初の湿地回復の事例。韓国・中国では湿地回復をして世界遺産登録になった。韓国では開発による喪失



写真-4 ヘラシギ (ニコラのスライドより)

感をもった地元市民の運動から、中国は政府の指導から、ときっかけは逆であるが、日本人の自然を愛する心は非常に強い。大阪には50年前の思いは今も根付いている。絶滅が懸念される重要種が渡来する大阪湾で湿地回復を実現すれば、世界遺産登録も目指せる(ニコラ)。韓国・中国の湿地回復が成功したのも、世界遺産を目指すという共通のゴールがあったことは大きい(ジェフ)。

◆ 保護活動を実現するためには

保護活動は自分たちだけではできない。さまざまな人々との協力が不可欠。現代の核心的科学技術と協働することも重要で、柔軟な心で課題に向かいたい。イギリスが野鳥の保護に対して理解があるのは、子どものころから自然体験が豊かなこと、自然との接続性を育てること、そのための活動もNGOがしている。その素地により、利益相反の立場でも対話が生まれる(ジェフ)。日本の自然保護支援への動機の調査で「個人の経験が最も重要」という結果が出ている(ニコラ)。私たち自身が自然教育をどう深めていくかが肝要ということか(佐久間)。

◆ “More, Bigger, Better, Join”

イギリスでのNGO共通のキャッ

ネイチャーポジティブ10原則

自然を守る世界最大のネットワークが考えた「ネイチャーポジティブ」の方向を誤らないコンパス。本物か、形だけ(グリーンウォッシュ)かを見分ける基準

1. 自然全体を尊重する(特定の自然の要素だけ拾って見せる)
2. 知識と経験(経験・勘や地元の知恵)を「サイエンス」を置く
3. 全体性行動(システム全体の課題・対象を忘れない)
4. 世界規模と地元の両方(バリューチェーンを捉えることも大事)
5. 主権化(意思決定から、知恵の共有まで徹底させる)
6. 協力(一団体・企業だけでは実現しない)
7. 調和性(気候変動・環境保全・社会正義を併進し、思いを込め、つまり、ネイチャーポジティブ)
8. 透明性(SMARTな目標設定や、コミュニケーションが大事)
9. 公正(地域の権利や、暮らしへの影響、自然資源での十分な利益配分に基づく同意も大切)
10. 測定可能性(定期的に数値目標を測り入れ、改善していく)

写真-5 ネイチャーポジティブ10原則(道家)

チフリーズに「もっと、多く、より良く、つなげよう」がある。これは一か所の成功をその場所で終わらせず、広げていくという考え方。野鳥のファンだけでなく、関心のない人をどう巻き込むかも重要(道家)。その成功例の「ナレッジの共有」がなされること。それによってヨーロッパでは自然回復が進んできた(ニコラ&ジェフ)。

◆ 国境を越えて保護していくこと

EAAPFのメインルートは中国から朝鮮半島にかけてで、中国の黄海や韓国セマングムが世界遺産に登録されたということは、国境を越えて連続的な世界遺産ができたということ。絶滅リスクの高いヘラシギのルートに脚光が当たれば、時間はかかるが、ロシアからオーストラリアまで国をまたいでつながっていく可能性もある。日本でも「東よか干潟」が声を上げれば、他の干潟や大阪湾の存在の大切さにみんなが気づくことになる。誰かが始めないと始まらない(ニコラ)。

◆ “Don't wait, Government”

もともと1,000ヘクタールあった大阪の干潟は今やゼロ。大阪では2030年までに果たして海域の30%を取り戻せるのか? 2050年までに生物多様性の損失を食い止め、完

2. 進捗をはかる指標

自然・社会資本のリターン率: 108.0%
(2024年度実績に基づきLIME20シンクを活用して算出)

自然・社会資本の利用 100

生物多様性が保全された地球

ステークホルダーとのパートナーシップ

自然・社会資本のリターンに貢献

環境の保全

都市内での生活

市場と文化の振興

持続可能な開発目標

自然・社会資本のリターン率

写真-6 進捗をはかる指標(三浦)

全復活させるというのを本当にみんなが望んでいるのか? 自然復元候補地を具体的に提示しても行政は目標を具体化する気配が見えない。私たち市民ももっと危機感をもたないといけない(納家)。IUCNの本会議では、“Don't wait, Government”というキャッチフレーズがよく言われる。行政というのは市民の声、企業の声、生活者の声、NGOの声、それが全部集まって調整して一つの方向を示す。だから「自然を守りたいという声をしっかり上げないとだめだよ」ということ。また、NGO自身が活動目標をどんどん社会に示すことで成長していく戦略をもつことが必要(道家)。

◆ 目標は大胆に!

課題は大きくとらえて、大胆に考える。大胆なターゲットを設定することで団結ができる(ジェフ)。イギリスでは1980年代に干潟こそ重要だという大きなキャンペーンをした。オランダ、デンマーク、ドイツでも30~40年前に大掛かりなキャンペーンがあつて、自然の回復がなされた。南港の先駆的な事例を見れば、日本が今後干潟保全のリーダーになれる。その心持で頑張ってほしい(ニコラ)。南港野鳥園創設に関わる運動は保全協会、野鳥の会、自然史博物館の先輩たちが関わってき



写真-7 夢洲に万博まであった生物多様性 (納家)

た活動なので、その後ずっとつながって活動してきている私たちが、もう一度、夢洲の跡地利用やフェニックスも含め、大阪湾岸の野鳥生息地保護に説得力を持ってやっていかなければいけない。どういうふうにNature Positiveアプローチをしていくのか、今後も議論を続けたい。博物館はこういう保全学術、行政、企業、皆さんの対話のテーブルでありたいと思う (佐久間)。

最後に、IUCN-J副会長・日本野鳥の会理事の葉山氏から「今後は開発後、前よりネイチャーポジティブかどうかの視点を持つこと」「若い世代に自然体験をしてもらうこと」「多様な立場での話し合いの場をつくる」という具体的な行動目標が示され、これを進めていくことが万博のレガシーとなることを願うという言葉で、シンポジウムは閉会いたしました。

3年前から願っていた国際シンポジウムは一応の成功を見ることができました。しかし私たちはまだ何一つ成しえていません。相変わらず湾岸部の開発は続いています。これからどうするのか?大阪自然環境保全協会設立50周年を直前に、そのスピリットの原点に戻って、再スタートをしなければ、と思っています。

2025年9月16日 大阪市へ表敬訪問

シンポジウム翌日、RSPB (英国王立鳥類保護協会) のニコラとジェフとともに大阪市を訪れ、「夢洲の自然再生と国際連携に向けて」をテーマに約40分懇談した。対応したのは、環境局、都市計画局、港湾局の3部署5名。RSPBの両氏は大阪湾の国際的価値と干潟再生の可能性を示し、湿地復元を気候変動対策や万博レガシーと結びつけて提言。IUCN-Jは助言的関与を表明。市は重要性に共感し、多主体連携の必要性を理解し、市長に内容を伝える旨を約束した。

なお、ニコラさんの通訳を道家さん、ジェフさんの通訳を山下さんが担当してくださり、十分な意思疎通ができた (山下さんは夏原会長の知人で、昨年11月、ニコラさんを保全協会に紹介してくださった方です)。

写真-10 表敬訪問のメンバー集合写真 (左から) 大野さん (NACS-J)、納家さん (日本野鳥の会大阪支部長)、加賀 (保全協会)、ニコラさん (RSPB)、ジェフさん (RSPB)、道家さん (IUCN-J会長)、垣井 (保全協会)、山下さん (立命館アジア太平洋大学教授)



写真-8 翌日の市役所への表敬訪問は話し合いに展開。



写真-9 ジェフの通訳は山下さん、ニコラの通訳は道家さんで。



10月15日午後、嘉田由紀子参議院議員の視察

「夢洲に琵琶湖源流の樹木を移植して森を作りたい。そのために埋立地の植樹の様子を知りたい」との要請を受け、夢洲グループは日本野鳥の会大阪支部、NPO共生の森の協力に対応。共生の森の育樹エリアを案内。その後、休館日ではあったが、南港野鳥園を訪れ、高田博さんに説明を依頼した。各団体から「大阪湾に必要なのは森ではなく干潟や海浜。里山の樹種はこの地では根付かない」と伝えた。



写真-11 共生の森視察



写真-12 南港野鳥園視察